

第 57 回プロレス文化研究会レポート

「レスラー 対 観客」

2017 年 7 月 8 日（土）八文字屋

発表 塩見俊一氏／社会学博士（立命館大学 ph. D）、カブキキッド（ダブプロレス）

「プロレス文化の現代的状況・研究の傾向と「担い手」に着目して」

0.自己紹介

塩見俊一 立命館大学講師(ph.D 社会学(立命館大学)) プロレスラー「カブキキッド」(ダブプロレス)

最近の研究関心 …戦後初期日本における、プロレスを含む興行の諸展開について

- ・プロレスの周辺の興行(プロ柔道、柔拳興行、ストリップと女子プロレス)の実態解明
- ・大都市圏以外ではどのように「プロレス」が受容されたか? …テレビを含むメディア状況
- ・海外の日本人社会で、プロレスはどのように受容されたか? など

1.プロレス研究概観 –日本を中心に『現代思想 総特集プロレス』(青土社,2002)以降の視点から–

S.アセール・M.ムーニハム『WWE の独裁者』BBM 社,2004 (Sex, Lies, and Headlocks 2002)

小田亮・亀井好恵編著『プロレスファンという装置』青弓社,2005

岡村正史『力道山』ミネルヴァ書房,2008

柴田恵陽編『女子プロレス終わらない夢 全日本女子プロレス元会長松永高司』扶桑社,2008

スコット M. ビークマン『リングサイド プロレスから見えるアメリカ文化の真実』早川書房,2008

現代風俗研究会編『現代風俗 プロレス文化』新宿書房,2010

小林正幸『力道山をめぐる体験』風塵社,2011

会場敬子『女子プロレスラーの身体とジェンダー』明石書房,2013

小林正幸「プロレスファンのメディア・リテラシー ファンのメディア観の分析から」『ソシオロジスト 16(1)』
2014

内間清晴・鎌田史「プロレス研究前史 プロレス文化論を議論するための基礎的研究」『沖縄キリスト教短期大学
紀要第 43 号』2015

諸井克英「<安川悪斗>の流血の行方」『同志社女子大学生活科学 vol.49』2015

秋山訓子『女子プロレスラー・小畑千代 闘う女の戦後史』岩波書店,2017

斎藤文彦『昭和プロレス正史 上』イーストプレス,2016

柏原全孝「デスマッチの社会学に向けて」『追手門学院大学社会学部紀要 11 号』2017

など

⇒いくつかの視座が交錯する場としてのプロレス

- ・ 歴史 …昭和史、力道山、女子プロレス(ストリップ)、メディア(テレビ、雑誌)
 - ・ 女性 …女子プロレス、女子レスラーの身体、意識、ジェンダー
 - ・ メディア …プロレスとメディア、プロレスマスコミ、メディアリテラシー
 - ・ 人物 …力道山、木村政彦、小畑千代、安川悪斗、田鶴浜弘、鈴木庄一、松永高司
- …ファンカルチャー、地域社会、サブカルチャー、芸能 etc...

→プロレスの現代的様相が研究される …現役選手、デスマッチ、メディア状況 etc...

⇒プロレス文化研究の進化/深化の可能性

2.プロレスの「担い手」「受け手」「作り手」

- ・プロレスを研究することの難しさ …一回性 スペクテイタースポーツ 格闘技 パフォーマンス…
→プロレスがどのようにつくられ、消費されているかを整理する必要性

<担い手> …プロレスを「生産」「消費」する人々と、それを支えるシステム

→レスラー、プロモーター、観客、メディア、ファン etc...

…一般的な「文化」とは異なる？ ex…アイドル文化、小林(2014)

<受け手> 性差、年齢、階層など、様々な人が想定しうる

プロレスファン →観客 …直接興行に参加、購入、声援やプラカード、コスプレ etc...

→発信者 …雑誌、SNS 等での投稿 動画撮影等のルール緩和

→消費者 …現場 メディアやSNS を介して アーカイブ ゲーム

観客 →プロレスファン …積極的な観戦態度や消費 プロレスという空間を「つくる」
→偶発的な観戦 …誘われた、招待等で楽しむ(楽しめない) →一部は「ファン」へ

<作り手>

メディア →プロレスについて報じる …一般紙のプロレス(ラー)特集、スキャンダル
→プロレスを「つくる」 …プロレスマスコミ
→ファン、観客がプロレスに接近する回路 …ファン、観客の「作り手」性

「ショー」 →プロモート …個人や会社組織、プロデューサー、ディレクター、マネジャー
→スタッフ …レフェリー、リング業者、イベントスタッフ、事務方 etc...
→観客 …「ショー」に必要不可欠 ネット配信やテーピングを介しての観客も
→レスラー …プロレスを「つくる」という意味で必要不可欠

- ・プロレスとメディアに関する検討 小林(2011)、斎藤(2016)など
 - ・プロレスファン/観客への検討 マイケル R. ボール『プロレス社会学』(1993,同文館)、小田ら(2005)など
 - ・プロレスファン/メディアへの検討 小田ら(2005)、小林(2014)など
- 一定の蓄積がみられるが、「プロレスラー」の研究は?
…人物やその歴史に焦点 岡村(2008)、秋山(2017)など
…ジェンダー、とくに女性プロプレイヤー、芸能人としてのまなざし 会場(2013)など
→レスラーがプロレスのなかでどのような役割を担う存在か …検討の余地があるのでは

3.プロレスラー 技術とキャリアの視点から

3-1.プロレスラーの技術 私的体験から

- ・参加期間 2003 年 10 月から 2006 年 8 月頃のあいだの延べ約 10 ヶ月間 (一度の渡航に付き 1~2 ヶ月程度)

・参加場所 アメリカ ニュージャージー州 (グロスター郡)、ペンシルベニア州 (フィラデルフィア、ピッツバーグ) のプロレススクール

・参加形態 スクール生および卒業生として練習等に参加。週3回程度、2時間程度

①格闘技的な技術

・受け身 …リング、相手との接触の衝撃から、自身の身を守るための技術の習得

・攻撃 …相手にダメージを与えるための技術の習得

…これらを支えるものとして、基礎体力、柔軟性、ボディビルディング等が求められる

②「みせる」ための技術の習得

→「受け身」と「攻撃」の双方に対して、格闘技的技術とあわせて求められる

・受け身…ダメージや相手の技の効果を大きく「みせる」ための技術

→純粋な「防御」としてのみでなく、パフォーマンス性を有する「受け身」

・攻撃…観客にダメージを「伝える」、自分の「強さ(うまさ)」を誇示する

…これらは観客のいない技術習得、つまり練習での習得が求められる

＜格闘技術＞とくみせる技術＞の習得

防御(受け身)

…頑強な身体(プロレスラー的身体)の形成
(格・見)

…安全性の確保 (格)

…「キレイ」な受身の習得 (見)



攻撃

…基本的な攻撃、技 (格)

…オリジナリティのある攻撃 (格・見)

…「安全」で「相手を選ばない」攻撃 (見)



…プロレススクールにおける技術習得では、第一に体力と格闘技的技術、とくに受け身に重点が置かれる

…観客の存在を前提とした「みせる」ための技術もまた習得が目指される

⇒これらが相互に結びつく(たとえば「安全」かつ「美しい」受け身を取る) …プロレス技術の習得

→試合ではこれらの技術によってリスクを回避 …(コンタクト) スポーツでも一般的にみられる技術の側面

→他方でそのリスクを顧みない動きも実行 …「芸能」「演劇」ではあまり存在しない?

3-2.プロレスラーのキャリア形成 日米での比較

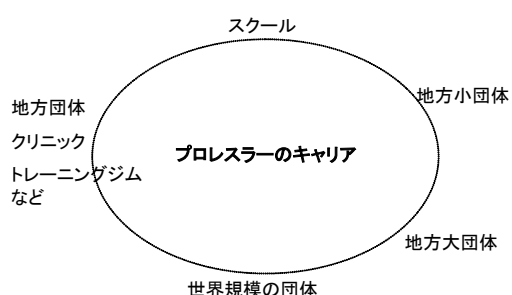
…「仕事」としてのプロレス、「職業人」としてのプロレスラーの性質とは?

…労働環境そのものがことなる文化(アメリカ、日本)ではどのような差異・共通点があるか?

＜日米でのプロレス体験の比較＞

人材育成、職業訓練としてのプロレス

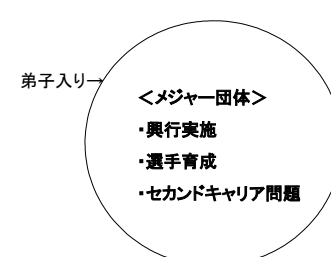
→アメリカの場合 …還流的



＜日米でのプロレス体験の比較＞

→日本の場合

…アメリカに比して希薄な関係性



若干の選手の移動、参戦など

＜インディ団体＞

- ・興行実施
- ・選手育成
- ・団体間の貸借

＜フリーランス＞

共通項 …肉体労働者、アスリート、芸能人(芸人)、セルフプロデュース

差異 …キャリア形成の過程(個人、組織 etc...)、職業人としてのゴール(収入、リタイア、セカンドキャリア)、専業・兼業、

→地域差のみではなく、世代、性差等によってもそれぞれの性質がある？

…多様な「プロレスラー」像を想定し、そのなかで注目すべき性質を踏まえた検討

4.小括 プロレス文化の可能性

- ・ プロレスの文化的研究の充実

…「プロレスブーム」に牽引されひろがる可能性

…多様な関心が研究として昇華されうる状況

…「ファン」が「発信者」となりうることで、さらなる蓄積が期待できる

- ・ プロレスの「担い手」としてのプロレスラー

→現代的なプロレスの本質(?)

…(擬似的であれ)「競争」を前提とした「身体的な文化」 →「近代スポーツ」的

…観客を前提にした身体的な技能の確立とその伝授・習得 →「芸能」的

⇒相反するのではなく、渾然となって成立している

→現代におけるスポーツ像への再検討

…勝利至上主義 →勝たなければ(負けなければ) スポーツではない？

…採点制スポーツの広がりや困難さ →技術の数量化という限界？

…芸能、芸術としてのスポーツ(技術)の可能性

フリーディスカッション

【質疑応答】

Q スクールにおける「サイコロジー」という科目の内容は？

A そういう科目を経験したことがないからわからないが、技の名前を相手に伝えてから掛けるプロレス技のスパークリングというのがある。スパークリングの後の振り返りで、「感想戦」があり、なぜ足への攻撃をしていたのに、腕への攻撃に転じたのか、などと振り返る。私の経験したスクールでは、座学より実践中心だったが、口立てで展開について指摘するという感じだった。上手い、下手はともかく試合を披露し、コーチが観客の目を想定してアドバイスを送っていた。

Q スクールと地方小団体をつなぐ存在、高校野球のスカウトのような存在はあったのか。

A スクールと地方小団体は一体化している。WWEについては様々なタイプのトライアウトがあると聞く。自分自身はワンマッチ契約しかしたことがない。アメリカでは団体所属はあまり一般的ではなく、個人である。

Q スクールに入学規定はあるのか。入学生がプロになる割合は？

A プロレスファンの中学生～20代が入学する場合が多い。50%くらいがデビューしているかもしれない。アメリカではスポーツに対する考え方がちがいで、「しごき」はない。スパークリングには、いわゆる MMA に近いスパ

ーリングと、プロレス技の掛け合いスパーリングがある。

Q シュートのスパーリングはなぜ必要なのか。

A アメリカのプロレスにはシュート幻想はあまり感じないが、練習にバリエーションをつけたいということかもしれない。

Q 全員がハイフライヤーの練習をするのか、拒否できるのか。

A もちろん、拒否できる。

Q デスマッチ・ファイターを目指して入門する者はいたか。

A いたかもしれない。

Q 「道場破り」が来たことは？

A アメリカでは聞いたことがない。破る意味がない。新日本で道場破りが来れば警察に通報するだろう。→1970年代まで存在したのではないか。YouTubeには、ボブ・ループが素人をこてんぱんにやっつける映像がある。いつなくなったのか気になっている。→安生がヒクソン道場の道場破りを敢行して、逆にやっつけられたのが90年代。概念はあったろう。→DDTのドキュメンタリー映画で、飯伏や男色ディーノが新日の道場をアポなしで訪れ、試合をさせてくれという場面があったが、新日の対応は会社を通してくれというきわめて常識的なものだった。

Q チェーンデスマッチが得意なグレート・マレンコがコーチをしていた。70年代と現在ではレスラーの養成方法に違いはあるのか。

A 70年代までは、ハート・ファミリーやキラー・コワルスキーのようにファミリーや個人コーチだったのではないか。80年代以降、スクールが一般化したのではないか。チェーンデスマッチはギミックであって、ベビーがベビーを育成するかなどは関係ない。ヒールがベビーを育成しても差し支えない。

1. プロレス研究概観

【レスラーの自伝は研究対象になるか】

●アメリカでは、日本のようにヤオガチ論争にならないとあったが。→株式上場を目指すのに事業申請書を出す必要があったり、ステロイド裁判があったりで、80年以降プロレスとは何かが自明のことになった。それに対し、日本ではまだ勝負論が生きている。

●研究からは、レスラーの自伝は排除している。レスラーはウソをつくのが商売だからだ。ただ、自伝同士の読み合わせは必要だろう。→レスラーの自伝は信用できない、というのはレスラーを特別視しすぎている。企業の社史を読むと、ウソが出回っている。→レスラーのウソはケーフェイに関するウソではないのか。→ジャンボ鶴田の修士論文は論文と言えるのか。プロレスがガチという大前提で書かれている。→論文の形式面でも疑問符がつく。ある章など、断ってはいるが、岡村正史『知的プロレス論のすすめ』の引用の域を越えて、丸写しが多い。→ケンドー・カシンこと石澤常光の修士論文は日本式プロレス経営に批判的な内容になっている。

【秋山訓子、合場敬子】

●秋山訓子『女子プロレスラー・小畑千代 闘う女の戦後史』は1955～68年の女子プロ史の空白期にスポットを当てていて意義深い。ただ、ハイライトである68年の小畑対ムーラの蔵前興行をテレビ初の女子プロ中継としているが、55年に現在のTBSが二日間女子プロを放送している。また、蔵前興行が入場無料のイベントだった点に触れていない。小畑の得意技はロメロ・スペシャルだが、プロレスそのものへの関心は後景に退いている。→むしろ、副題にある「闘う女の戦後史」という部分に重点がある。小畑がこう思っている、こう語ったという点を記者が補強した形で、ジェンダー・スタディーの仕事だろう。→合場敬子『女子プロレスラーの身体とジェンダー』も、著者は女子プロを見たこともないのに、亀井好恵さんからレクチャーを受けて書いたらしい。女子プロは男子以上に知らなくても書けるのか。→文化人類学では、アフリカのある部族についてまったく予備知識

なく論文を書いている。→経営学でも、プロレスを全く知らずにプロレスを経営する企業について論文を書ける。ファンからは反発を食らうかもしれないが。→水島新司もプロレスを知らずにプロレスをテーマにした漫画を描いたことがある。→彼のプロ野球漫画もデタラメだがね。

【立花隆、柳澤健】

●多くの素晴らしいノンフィクションをものにしてている立花隆はプロレス嫌いでは有名だが、彼の実力で、もしもプロレスをテーマにした作品を書いたら読んでみたい。→彼は「プロレスというのは、品性と知性と感性が同時に低レベルにある人だけが熱中できる低劣なゲーム」と発言したが、トランプ大統領の支持者を見ていると、立花は彼らのことを予見していたのかなとも思えてくる。立花がそういう視点でアメリカ社会を斬ることはありうるかも。→下劣なファンもいるが、いろいろなファンがいるわけで、無知ゆえのレッテル張りだと思う。→要するに、プロレスに関しては判断停止してしまうということだろう。立花は週刊文春でプロ野球担当になったことがイヤですぐにやめた人。プロスポーツに関心がない、ましてやプロレスは、という感じだ。→アメリカ人の多くは直径10マイルの円の中で生活していて、日本人・中国人・韓国人の区別もつかない人々だ。東京都民も似たようなもので、その時の「風」で容易に民意が変わってしまう。

●「ダ・ヴィンチ」8月号に三田佐代子（サムライのキャスター）のインタビューが掲載されている。「なぜ相手の技を避けて受けるの？」という質問に「相手の力量を知りたいからです」とか「シナリオがあるんでしょう？」に「そんなものはない」と答えている。ムラの中の人とはそうとしか答えられない。30年前と何ら変わっていない。一方で、井上譲二はタブーに踏み込んだ本を多く出版している。柳澤健氏は11月に『2011年の棚橋弘至と中邑真輔』を出すそうだが、タブーに触れる本を出してきた柳澤氏に新日本がどのような条件でOKを出したのか気になる。→手品師は「タネも仕掛けありません」と言って手品をするわけで、自らタネを暴露することはしないし、望まれてもいない。→2012年に増田俊哉の『木村政彦はなぜ力道山を殺さなかったのか』と柳澤健『1985年のクラッシュギャルズ』が大宅壮一ノンフィクション賞を争って増田が勝った。そのときの立花隆の選評は「増田はプロレスのタブーに踏み込んでいるが、柳澤は踏み込んでいない」というものだった。柳澤氏も踏み込んでいるのにと思っていたが。立花隆は柳澤氏の作品を読んでいない可能性があると思う。

2. プロレスの「担い手」「受け手」「作り手」

【村松友視以前】

●田鶴浜弘氏が1957年の時点で「オールドファンになつかしいが」と言っていたというのが面白かった。古舘にも「ひとり民族大移動と言われているが」なるフレーズがあった。自分で語っておいて、それを引用するという手法はこの業界に一般的なのか？→プロレスに限らず、よく使われる手法だと思う。→ここでいう「オールドファン」とはアメリカのプロレスの事情通ではないのか。→「オールドファンのこういう声も聞かれる」という書き方をしている。プロレスそのもののオールドファンは存在したと思う。ファンに代弁させる書き方が一般的だ。→「村松以前」という表現で、プロレスマスコミが軽視される傾向があったが、最近見直されてきている。→アメリカに村松のような存在はいたのか。村松が突出しているということはプロレス研究になりうる。→ピークマンの本が面白いが、彼は歴史研究者だ。→村松は歌舞伎論をプロレスに応用した。しかし、本来は糸井重里が書く予定だったが、糸井が断り、村松にお鉢が回ってきた。偶然的要素もあったということだ。

【さまざまな観客】

●プロレスファンを観客、発信者、消費者と分類したが、他の理解はないのか。→甲子園に野球のルールを知らない人は来ていないと思う。サッカーだとありうるかな。ロックフェスの場合は、どれかのバンドをひいきにしている人が来るだろう。→新日本の売り興行の場合は、ファンではなく、関係者との人間関係で来る人がいる。関係者への挨拶が終われば、帰りの車が混むのを避けるために早めに帰ってしまうケースはある。島根の医者でアマチュアプロレスをやっている人がいて、その人の興行は日曜の娯楽として地元で定着している。プロレスは

文法通りやれば、それなりに観客を喜ばせることができるようにできている。→会社の余興としてプロレスを行うケースが増えているようだが。→関西では、大阪プロレスがクローズド興行として、会社リングを設置して行っている。生命保険会社の優秀社員表彰式とのセットであったり、足場屋さんが倉庫で行ったりする。→偶発的観戦者の研究が進んでいない。→プロレスを一回なら観戦したいというニーズは確実にあると思う。

3. プロレスラー 技術とキャリアの視点から

【受け身論】

●受け身の技術が進化しているということと、「なぜ相手の技を受けるのか、おかしい」という疑問とのせめぎあいには依然としてあるのではないか。→三沢光晴は受け身の天才だった。ジュニアヘビーや女子プロにおいては、バンプの技術を素直に評価される傾向がある。受け身は 2〜3 時間の興行を鑑賞に耐えるものにする技術だ。本当に痛いときは痛がらない。→WWE のジョン・ロウリネイティス (ジョニー・エース) は、アメリカ (WWE) のレスラーはキャラクターだが、日本のレスラーはアスリートだと評した。当たっている部分があると思う。WWE はカウント 2.9 の攻防は少なく、新日本は多い。掟破りの攻撃も横行している。→WWE も年 4 回のペイパービューでは 2.9 の攻防が許されている。新日本の場合は、ビッグマッチで上位 5,6 人にのみ 2.9 が許されている。地方興行では、決め技が出ると決まる。棚橋など地方ではハイフライフローを出さない。得意技のインフレ化を防いでいる。→新日本の低迷期には、石井の試合がいちばん受けている状況があった。石井のような試合が今当たり前になっている。→セールしない攻防のことだと思うが、それもインフレになるとダメだ。山本小鉄はドラゲーターを評価していなかった。セールしないから。ラリアットを受けた人間が 2 秒後にロープに向かって走っているようではダメだ。しっかりと痛がりなさい。ダメージを表現しなさい、と。

●猪木にしても、日本のレスラーの受け身は大人しくスポーツ的だ。ところが、ジャンボ鶴田はテキサスのアマリロでプロレスを教わり、テリー・ファンク流の大げさな受け身を学習してしまった。したがって、真のトップになれなかった。レスラーはアスリートの部分があればいい。→NHK の「ニュース 9 時」が藤井聡太をほかのニュースを差し置いて 32 分も取り上げたのは将棋が真剣勝負だから。日本はエンタテインメントより真剣勝負の方が好きだ。→サンマルチノは派手な受け身をとっていない。受け身が派手になるのはバーン・ガニアからだ。ガニアはスクールを設立し。そこから、リック・フレアーやリッキー・スティムボートが育った。アメリカでは 70 年代くらいまではまだアスリート的だった。受け身にも流派が存在する。→格闘技的な受け身と見せる受け身は相互に結びついていることが重要だ。→ジェイ・リーサル のリーサル・インジェクションという技は無理がありすぎる。やられる方がずっとリングの中央で立ったまま待っていなければいけない。→リーサルはアメリカでは受けているから良いではないか。技の説得力が増すには時間がかかる。→ロックのピープルズ・エルボーは静止してからミエを切って放つ。いったん認知されたらリアリティと関係なくなる。武藤のシュミット流バックブリーカーからムーンソルトプレスもしかり。→面白かったら許されるということもある。現在のタグチ・ジャパンは「お笑いコーナー」として許されている。荒川真以降の「笑い」の流れに掉さしている。→タグチ・ジャパンはルチャ・リブレを基本にしている。

【プロレスはスポーツか】

●ドラゴン・スープレックスが登場したときは誰にも真似できないと思っていた。ラリアットの受け身にしてもパット・タナカのような受け身は誰にもできないと思っていた。ところが、今やみんな真似している。→連続写真やビデオで真似しやすくなった。→1974 年の猪木対坂口で、坂口のアトミックドロップに猪木がセールせずに立ち上がって、驚いたことがある。→当時の猪木は大木の頭突きにもセールすることなく、立ち向かっていった。→吉本新喜劇では、ある役者のギャグが定着すると、みんながバンプをとるのが引退まで続く。それと比べれば、プロレスはスポーツだ。→スポーツの定義自体が混然としてきている。→定義がゆらいでいる。スポーツ学の専門家の前で、プロレスについてスポーツではないという話をしたときに、スポーツに入るのではと指摘されたこ

とがある。→近年はエクストリーム・スポーツが普及している。スケボーやサーフィンなど「遊び」がオリンピック種目になっている。→Xスポーツはトップ・プロがやっていて常人にはできない。プロレスは2週間の特訓でデビューできる。→スケボーでも2週間の練習でマスターできる。→高校生がトランペットを2週間練習しただけで全国大会に出場することはありうる。ピアノやバイオリンではありえない。ボーカルはトレーニングなしで行ける。これらすべてが音楽と呼べる。つまり、キャリアがあるかないかは簡単に区別できない。

●レスラーで大学講師という立場の人は他にいるのか。→石澤常光がいる。現在日本には600名ほどのレスラーがいて、週プロのレスラー名鑑には200数十名が載っている。レスラーの立場ですべてのことがしゃべれるかどうか、600名を代表していることになる。引退のハードルがゆるくなり、兼業に優しくなった。芸能事務所とのつながりから一般メディアに進出することもできるようになった。→古典プロレス愛好家も存在する。おじさん優先社会の必然的現象で、プロレス固有の現象ではない。→やる側にすれば、見に来ないのに文句だけ言いやがってと思っていたが、アーカイブを楽しむという現象が出てきてしまった。→プロ野球の場合は巨人以外のアーカイブは乏しい。→野球は生中継だから収録されていない。昔のテープは高価なので上書きされていた。→国際プロレスの場合はファン所蔵のテープを編集している。日本テレビは日プロのテープを相当持っているはずだが、馬場元子氏が馬場の利権を主張している。一方で、日本テレビも馬場の肖像権を主張している。テレビ朝日が馬場の映像を商品化しようとしたが、ダメ出しが出た。元子氏は馬場・猪木がいつしよに映っているのが許せないそうだ。